

## 外部評価委員会(第2回)記録

日 時：令和2年2月4日（火）15時30分～17時50分

場 所：経済学部大会議室

出席者：能見委員，上林委員，井川委員，中村委員，橋本委員，福井学部長，  
森岡評議員，唐渡副学部長，金経済学科長，岩内経営学科長，  
香川経営法学科長

陪 席：中三川人社系事務部長，中村人社系総務課長，竹内人社系学務課長補佐，  
波多野人社系総務係長

(福井)本日はお忙しいところお集まりいただき誠にありがとうございます。それでは第2回の外部評価委員会を始めます。まず、前回のメモをお配りしておりますので、簡単に説明します。前回は最初に私から富山大学経済学部の概要を説明させていただいた後意見交換をさせていただきました。いくつかの質疑の後、どういうテーマを取り上げるのかという質問がでまして、私の方からは経済学部としては最初から特定のテーマに絞ることは考えていないと申し上げたところ、やはり焦点をしばって検討しようということになり、検討の結果、どういう人材が求められているか等も含めて、教育に絞って検討することになりました。そして教育にシボるなら、ゼミや授業を視察する機会を設けた方がよいということになりました。そこで、1月23日に授業視察をしていただくことになりました。1月23日の簡単な授業視察メモをつけております。当方で候補日の選択ができなかったものですから、能見先生だけの参加ということになりました。授業を2つとゼミを2つみていただき、教員へのインタビューをしていただきました。能見先生の方から授業視察についてのコメント等いただければと思います。

(能見)二つの授業を視察しましたが、どちらも100人前後の学生が参加していました。必修科目ではないのにかなりの数が参加して、私語もなく真面目に授業に臨んでいました。ただ、私語がないのでよいかといえば、携帯をいじっているものもいて必ずしもそうではない。教員の感触としても学生はおとなしく、質問も少ないということでした。ゼミも二つ視察しましたが、いずれも学生の力を引き出していることが見て取れました。ただ、一つのゼミの質疑応答では、卒論の報告だったからかもしれませんが、それほど積極的なやりとりはなされませんでした。全体として積極性に問題があるのかなと感じました。インタビューについてはここに書かれているとおりです。

(福井)それでは教育にかかる項目を抜き書きした資料がありますが、これに沿って少しコメントしてまいります。1. 講義のうち(1)カリキュラムについてですが、時間割は前

回お示した資料 22 頁 23 頁のとおりです。1 年生の時には基礎科目を必修としております。卒業要件としては、学科ごとのしぼり、コース制によるしぼりがあります。(2) 履修者数ですが、昼間主の科目では 100 人を超えている場合が多く、少ない場合でも 50 人以上です。(3) 出席率はカウントしていませんが、個人的には最初は登録者 8 割くらい、それから減っていったボトムは 5、6 割、それから試験が近くなり回復していく感じでした。(4) 教材については、教科書が別途あるかもしれませんが、レジュメまたはパワーポイントを使っている場合が多いです。なお、事前にレジュメ等教材を学生が見ることができるように登録しておくシステムはありません(この後訂正、システム自体はある)。(5) 学習意欲ですが、授業中に手を挙げて質問する学生はほとんどいません。授業終了後の質問も個人的には少なくなっていると思います。(6) 満足度ですが、資料 48 頁 49 頁のとおり、授業アンケートではそれなりの満足度は示されています。ただ、他の学部と比較すると経済学部は低い方だとされています。(7) 成績分布ですが、本日資料をお配りしました。今年の前期、履修者 50 名以上の科目の状況です。昨年からは秀については 10%まで、優は秀と合わせて 40%までとしましたが、比較的守られています。不合格の比率については基準を決めていません。先生方の考え方次第です。

2. ゼミについて、(1) 全体構成としては、1 年後期から入門ゼミ、基礎ゼミ、専門ゼミ、卒業研究と切れ目なく開講し、指導教員をつけています。学生生活上問題のある学生が増えてきているので、対応したものです。(2) 参加者ですが 10 人がめどです。どうしても人気の先生に集中する傾向はあります。(3) 学習意欲ですが、ゼミではそれなりに見えますが、常に発言する、リーダーシップをとる学生は多くないです。(4) ゼミの進め方は先生に任せています。多くの先生は自分自身の先生のやり方を踏襲する、もしくは改良したものと思われます。(5) 学外学習についても、先生に任せていますが、学科毎で異なりますが、現地調査や裁判傍聴をするゼミはあります。(6) 他大学との討論、大会参加については、視察をしていただいたゼミの一つが大会参加への準備をしていたということですが、これも先生に任せています。こうしたものをもっと推奨するという考えもあるかと思えます。

以上取り上げた項目のコメントをさせていただきました。先生方からご意見をいただければと思います。

(上林) 私も都合がつけば授業視察をしたかったです。能見先生は授業視察をされたときにどこに座られましたか。

(能見) 一番前ではありません。やや後ろの方です。

(上林) 学生に視察があることを事前にアナウンスしていましたか。

(福井) 二人の教員のうち、一人はアナウンスしていたとのことでした。

(上林) 概して静かだったということですね。私の個人的な経験を申し上げると、東北地

方の国立大学に行ったときに静かで集中力はあるのですが、活気はなかった。他方近畿地方の私立大学に行ったときは私語が多くてやかましいが、質問も活発だった。ところが、ちょっと理屈っぽい話をするとガクッと参加者が減る。地方国立の方は減らない。試験をすると地方国立の方がよく理解している。富山大学もその地方国立と同じで、非常に理解されているのではないかという感じがしました。あとやる気があるかどうかは目つきでわかることもありますね。スマホをいじっていた学生は目つき鋭くなかったのかもしれませんが、最近はスマホもバカにできなくて、わからない点をスマホで調べているときもあるので、判断が難しい。

(能見)後ろの方の学生は先生が黒板に書いていることも追っていなくて、集中が足りない。前の方の学生は熱心だったから、2つのタイプがあったということですね。

(上林)ところで、レジュメをアップロードする全学的な仕組みはないのですか。神戸にはそれがあって、予習、復習ができるようになっていて割と便利です。

(能見)休講情報とかも伝えるシステムはないですか。

(岩内)休講情報を伝えるシステムはあります。また、教材を事前にアップロードするシステムもあります。

(福井)申し訳ない、私が知らなかっただけですね。システムはあるということです。

(能見)先程説明された項目については、3として卒論、4として卒後、これは就職も含めてですが、これらも付け加えた方がよいと思います。卒論については、よくできたものをまとめた論文集を見せていただいた。経済・経営系は英語で書かれたものもあったので、感心しました。これは最近そういう傾向なのですか。

(上林)先生によっては英語で書かせる場合もあります。

(能見)卒論にかかる時間は1年とか、半年とか、どれくらいですか。それから冊子にのるものは一旦出た後でもう一度手が加わっているのですか。それからよくできたものでなく、一般的なレベルがどうかというのを知りたい。テーマだけでもわかれば教えてほしい。

(福井)卒論にかかる時間については、私のゼミでいえば、就職活動が3月頃から本格化するので、4年前期には手を付けられずに、最後の半年になっています。経営はもっと早く、2年間かけてやるのかもしれませんが。学科によって違うかもしれません。

(唐渡)論文集に乗せる論文の選択は指導教員にお任せしています。基本的には出てきたものをそのまま載せています。

(能見)序文では、今後卒論を書く学生の参考にすると書いてあったので、あまりレベルの高いものが載せられてもおかしいのかもしれない。英語の論文はどうですか。

(唐渡)経済学科の中には英語で文章を書くということを主体にしている先生もいます。ただ、載せるにあたってのネイティブチェックまではしていないと思います。

(橋本)ゼミは1年後期から、3年半にわたって、10人程度で行うということですか。

(福井)最初の入門ゼミは定員 14、15 人で、その後のゼミは定員 10 人までです。

(橋本)途中で変わることはできますか。

(福井)入門ゼミは学生に選択権はなく、学籍番号で分けします。基礎ゼミから学生自身が指導教員を選択できます。基礎ゼミ履修後に専門ゼミを履修するときには、指導教員の変更も可能ですが、専門ゼミの 2 年間は同じ教員です。

(橋本)神戸も同じですか。

(上林)神戸は最初に初年次ゼミ、これは図書館見学とか大学生活の基礎、イントロダクションのようなものです。専門ゼミは経済・経営では 3 年からです。法学部にはゼミはないです。経営は 2 年間かけて卒論を書かせます。実際に書くのは最後の半年ですが、それまでにグループワークをしてテーマを決めたり、他大学と合同ゼミをしたりして、最後に仕上げる。達成感を味わわせるのが重要な機能ですね。

(福井)先程の私の説明は、法律の説明だったかもしれませんね。岩内先生、富山の経営はどうですか。

(岩内)入門ゼミで基礎的なことをやる先生もいれば、いきなり専門的なことをやる先生もおり、進め方は先生によって違います。また、どうしても先生と合わないということで、3 年から 4 年でもゼミが変わる場合もあります。この場合は卒論のテーマが変わります。また、先生によってはテキストも英語、プレゼンも英語という先生もおり、卒論も英語になります。要するに先生によってゼミの進め方には多様性があります。

(福井)香川先生、経営法学科はどうですか。

(香川)入門ゼミは読み書き中心ですが、どうしてもそれだけだとモチベーションが下がるので、判例を組み替えたものを読ませたりもします。基礎ゼミでは、専門ゼミの準備段階として、判例の読み方とか文献の調べ方を教えています。専門ゼミは指導教員の関心に基づいて進めていきます。判例を読むゼミが多いので、卒論のテーマにすぐには結びつきません。結果として、テーマ選定が経済、経営より遅くなります。

(福井)金先生、経済学科はどうですか。

(金)経済も基本的にはかわらないです。入門ゼミはレポートの書き方とか基本的なことをやる。基礎ゼミは、私の場合、自分の専門分野に関連した基本的な内容、それにプラスしてレポートを書かせます。専門ゼミに入ると完全に各先生の専門分野を勉強しますが、私の場合 1 年間かけて資料を探して卒論のテーマを決定させます。また、3 年の時に他の大学との討論会や大会に参加して、レポートを書かせます。

(橋本)英語でゼミをされる先生は人気がありますか。

(岩内)人気のある先生とない先生がいます。

(橋本)そのゼミにいくと英語でやられるよということを学生は理解していますか。

(金)シラバスに英語でやることはちゃんと書いてます。

(橋本)英語でゼミをする先生は、経済にも、経営にも、法律にもいますか。

(香川)経営法学科はいません。

(橋本)英語でやるゼミは女子学生が多いですか。

(岩内)その年によって違いますね。海外に行く時に保護者が許す、許さないの問題はありますね。

(上林)英語でやるゼミは留学を義務づけているのですか。

(岩内)義務付けてはいません。お金の問題です。

(橋本)90周年で寄付したお金がまだ残っていますから、海外でいく学生のために有効に使っていただければと思います。海外に行って海外の人と伍していくことは地方国立大学にとっても意義があると思います。

(岩内)アドバンスト・プログラムの国際コースは今3名いますが、そのうち2名はやめたいと言いついています。理由は海外に行く場合の経済的な問題です。

(福井)我々が制度設計する時に半年なら15万円の助成、1年なら30万円の助成と一律に決めたのですが、今話を聞いてみると事情によっては増額した方がよいかもしれませんね。

(橋本)90周年の寄付金については二代前の学部長の時に決まったものですが、運用の仕方について練られていない感じがします。家庭のハンデキャップがある場合は事情を斟酌してもよいと思います。運用の仕方についてももう少し検討してほしい。それから、こういう制度があることをもっとPRしてほしい。

(岩内)留学の説明会では説明しています。ただ、留学の説明項目が多いのであまり記憶に残らないかもしれない。学内掲示はあまり見ない。

(橋本)ゼミで説明してもらえばもっといいかもしれない。いずれにしろ、せつかく寄付したのだから、よくPRしてほしい。

(上林)学生への連絡は学内掲示と電子化されたものですか。神戸は遅れていて、2年前からやっと電子化による通知をしたところです。

(福井)先程私が間違えたくらいで、富山も進んでいるとはいえません。システムとしては二つあるということですね。

(能見)海外行くときに提携校はあるのですね。グローバル教育を目玉にするなら、個人に負担させるのではなく、制度化して大学側で費用を出す形にしなければならない。少なくとも、アドバンスト・プログラムのようなものはね。

(福井)経済学部は学生数が1学年330人と多くて、学生生活上の問題が複数発生しました。そこで何等かの対策を考えなければならない。従来は1年前期に入門ゼミが終われば、1年の空白期間があつて2年後期から基礎ゼミでした。この1年の空白期間に学生が生活のリズムをくずすことが多いということで、切れ目なくゼミを開講することとしたわけです。他の大学でもこうした切れ目のないゼミは実施されているのでしょうか。

(能見)そもそも私立ではゼミは必修ではない。

(福井)そういう意味では富山は手厚いのですかね。

(上林)神戸では専門ゼミは3年からで、2年はゼミがありません。2年の時点でやる気を失う学生が多いことは従来から問題になっています。ただ、先生方もやることが多くて一杯一杯です。そこで、3年のゼミの選択をするときに、1、2年の成績が優秀な学生は優先的に選択できるという制度にしています。

(井川)ゼミは少人数で、特殊なところで能力を伸ばすものだと思います。学力を伸ばすか、討論などの社交的な能力を伸ばすか。どれも重要で、それぞれの特徴を大学としてどうサポートするか。いろいろな形のサポートがあるが、それを考えられたら良いと思います。講義については大学の先生だけが訓練を受けていません。今新しい教育の仕方が入ってきて、教育の仕方が変わっている。こういうのがありますよというのを先生方に与えたら、先生方は使えるようになる。得意な先生はいるはずなので、その人に教えてもらう場を設けたらよい。ゼミについても経済学部としてサポートするメッセージをだせばよいと思います。最後に、授業評価アンケートの話がありましたね。私なんか学生は自分が勉強してないくせにと思ったりもしましたが、良いスコアの先生はいるわけですね。一応客観的な学生の評価ですから、表彰状を作って差し上げる形にしたらどうですか。履歴書の中で、何年度に教育賞を受けたと書けるわけで、インセンティブを与えることになるのではないですか。また、そういう先生が皆にやり方を教えたらよいと思います。

(福井)授業評価については、個人毎のディスクロージャーはしていない。誰が高いとか、低いとかいう資料は私も見たことがありません。

(上林)ベスト・ティーチャー賞ということですね。

(岩内)昔はそうしたことをやっていたが、途中から止めた経緯があります。スコアの良い先生の授業を他の先生が見に行ったこともありましたが、やらなくなった。

(福井)そういう歴史はあるのかもしれないが、考えられる方策ですね。

(上林)私学ではそれに基づいてボーナスを出すところもある。

(井川)大学の先生は授業についてとやかくいわれたくない、授業は自由にすればよいという考えがベースにあるのかもしれないが、そんな深刻に考えなくてよい。1枚表彰状を出すだけでインセンティブになるならよいではないですか。

(上林)深刻に考えすぎて、廃止になったのではないですか。分野によって異なる点はあるかもしれませんがね。例えば、ゲーム理論は基礎がわからないと面白くなってこないとか、経営戦略論は最初から面白いとか。

(福井)他の学部比べて、授業の満足度が低いと言われて、対策が必要だと考えていたところですよ。参考にさせていただきます。

(中村)2点問題提起というか、考えるべき点があると思います。富山大学として、世界に通用するトップレベルの研究者を求めるのか、それとも地方大学として、地域への貢

献、地元とのプラットホーム作りに貢献する人材を作っていくのか、どちらを選ぶかで人材の育成方法も違うのではないですか。地域への貢献とか、地元とのプラットホーム作りをゼミの中でやってもよいのではないか。また、実業界では最近、SDGs、持続可能な発展をするためのプログラムを各企業がやっという流れがあります。SDGsに関わっているようなゼミや講義が今後求められていくのかなと思います。学長は面白い大学というキャッチフレーズを使われているが、それを具体化するキーワードとして、地元とのプラットホーム作りができる人材や社会に持続可能な発展を与える人材ということがあるのではないか。

(橋本) 富山大学経済学部では、学生へのインセンティブとして成績優秀者に対する表彰制度はあるのですか。また、グッド・ティーチャーを表彰する制度はあるのですか。

(福井) 成績優秀者の表彰制度はあります。副賞については、学部は大学からですが、大学院は大学から出ませんので越嶺会さんからの寄付から出しています。

(橋本) 表彰状を出すだけですか。

(中村) 私立は成績によって金銭面の優遇をする制度がありますね。入学時の成績上位5名は授業料を免除するとか。

(橋本) 神戸大学では60万円くらい報奨金を与えるシステムがありましたね。

(上林) 神戸では経済、経営、法律の成績優秀者に六甲台賞とか、同窓会から報奨金を出しています。割とどこの大学でもあるのではないですか。

(福井) 内部の検討では、大学から直接キャッシュを出すことには抵抗がありました。

(上林) いや、同窓会から出すのです。

(福井) そうした仕組みをとって、とにかくキャッシュを出すわけですね。また、検討します。

(能見) 国立大学では、同窓会も含めて、キャッシュを出すことはあまりないと思う。

(福井) 井川先生が先程言われたことはそれぞれの先生方のゼミの特徴を活かすということですね。我々はゼミについても各先生にお任せでなく、何か統一的な方針だとかを打ち出す必要があるかと考えていたのですが、ゼミというのはそれぞれの先生方が個性を出して、それぞれのやり方をされるわけだから、それはそれでよいということですね。(井川) もちろん先生方はゼミを自由にやっていただいたら良いので、ただ学部としてはそういう方向でサポートする。サポートしてもらっているという意識をもつと他大学との討論なども参加しやすいですね。議論する力をつけるということならディベート大会をサポートしましょうとか。そういう姿勢を示すと違ってくる。もちろん学力も大事ですから、例えば検定試験で何人受かっているとか、それなら試験の受験料をサポートするとか。

(福井) 今、ゼミで他大学に行くときに、経費は学部から援助ができていますか。全部先生

の研究費から出しているのですか。

(金)例えば、金沢とか、新潟に行くときは、バスをチャーターすることが多いですが、越嶺会の寄付金とか、先生方の研究費とか、あるいは学生に負担させていますね。

(波多野)一部は学部で負担しているのもあります。

(福井)わかりました。いずれにしろそうした形の支援も一策だということですね。

(上林)各ゼミの特徴をわかりやすくみせることが大事ですね。ゼミについての基準は少なければ少ないほどよい。基準が厳しいと似たり寄ったりになる。大学の基本は自由、ここにいて楽しいと思う気持ちにさせることが大事だと思う。

(能見)講義とかゼミの内容は自由でよいのだけれど、教え方をどうするか。FD については少し足りないところがある気がする。どうして途中からやめたのか、多分形骸化したということだろうが、それでよいか。法科大学院でも他の先生の授業を聞かなくてはならないことになっていた。一番目が内容で、二番目が教え方、そして三番目は支援だろう。学部としてできる支援は何か。3つのレベルで考えていかななくてはならない。

(中村)新しい講義やゼミを考案して実施するというのは大学でできるのですか。企業では、新しい営業とか、商品を考えてそれを実施するのは当たり前だが、同じように大学でも、大学のブランド向上の為に、こういうゼミ、講義をやりたいとあって、実施することは実務的に可能ですか。

(福井)形式的な話をすると、平成 29 年に定員を減らすことなどを文科省に申請し、設置審認可を受けています。こういう授業をやりますとして申請してますので、認可を受けた授業科目は 4 年間維持しなくてはならない。一方、大学全体で人件費を減らすという方針があり、現実的には文科省に出した授業科目を維持するのがキツキツということがあります。ただ新しい時代のニーズに合わせて見直しをしなければならないというのは当然ありますから、うまく調整しつつ見直しをすることになります。そういうしぼりはあります。

(上林)国立大の場合はすぐにはできない。まず、文科省に申請しなければならない。実現するころには次のことを考えなければならない。

(中村)半年ほど前に、新潟大学で地元と連携して「日本酒学」の授業を創設したという新聞記事を読みましたが。

(上林)特殊講義、特設の科目として創設することはできます。履修要件に関わってくる科目はそう簡単には変更できません。

(井川)寄付講座を利用することはありますね。

(上林)企業から講師に来ていただいて 15 回くらいお話ししていただく、そういう形では可能です。

(福井)講師を外部から招ければ、人件費はかからないので、臨機応変に対応することはできますね。



(橋本)北陸銀行とかは、寄付講座を開設しているのですね。

(福井)そうですね、寄付講座は北陸銀行、野村証券などが開設していますね。

(橋本)前回アドバンスト・プログラムの活性化という話が出たと思うのですが、アドバンスト・プログラムは今の2年生から具体化しているのですか。

(福井)2年生のゼミから始まっています。

(岩内)アドバンスト・プログラムに入らない優秀な学生もいるので、どうやって入れようかと考えています。今年の募集では応募者が2名と少数でした。

(橋本)その辺の問題点はまだ見えていないのですか。たとえば、三つのコースがあるけれど全部とらなくてはならないのかとか。

(福井)三つのコースは相容れないです。公務員になる人、銀行員になる人、国際ビジネスマンになる人ですから。

(橋本)三つの中から自分が好きなものを選ぶということですか。

(福井)そうです。

(岩内)ただし、ゼミは2年から始まりますが、2年のときは三つのコースとも共通のテーマを取り扱います。

(能見)コースを作るのと、いい学生を集めるのは一致しない。例えば、自分の高校では理科コースと文科コースがあったが、理科コースは理科系に進むというよりいい学生を集めて受験させる、文科コースは内部進学という狙いがあった。三つのコースにいい学生が来ないからと言って悩むのはよくないかもしれない。入ってきた学生が伸びればいいと考えたらよい。

(福井)まだ2年生で、就職する時が初めて結果が出る時ですので、これからということで、少し長い目で見えていただければと思います。

(福井)いろいろご意見いただきまして、誠にありがとうございました。それでは、今後の進め方についてお話ししたいと思います。私どもから十分に検討したものを提供できなくて誠に申し訳なかったのですが、委員就任のお願いをしたときに今期中に2回程度の開催であると、それから今期中に報告書をまとめると申し上げていたこともあり、事務局のたたき台としては、今日の議論を踏まえて委員の皆様からコメントをいただいて、そのコメントをベースに報告書を作るというのでどうかと考えました。教育というテーマにしぼりましたので、経済学部の課題、改善すべき点、良い点、あるいはそのどちらでもないが今後求められる点などをコメントしていただいて、それを報告書の形にするというのでどうでしょうか。

(上林)それでいいと思うのですが、今日の記録はもらえますか。

(福井)記録は作成して配付いたします。それからいただいたコメントを事務局でとりまとめるのか、それともコメントをそのままの形で報告書にのせるのかという点で二つに

分かれると思います。どちらの考え方もあると思うのですが、そのままのせる方が先生方の意見をより反映することになるので、事務局ではそちらの案がよいのではないかと考えました。いかがでしょうか。

(能見)それぞれのコメントが出てきた時にそれをさらに一つにまとめるのは難しいし、それを事務局がやるとすれば外部評価といいながらどうかということになるので、その方針でよいのではないか。

(井川)私たちの議論を踏まえて、学部長がまとめていただいた方がよい。

(能見)それぞれの委員が自分の関心のあるところをコメントするだけでいい。全体についてコメントするのは難しい。コメントの長さは自由だけれど、出してもらったものを束ねる。若干整理するとすれば、それぞれのコメントとは別に概要的なものを付ける。でもまあ、3月中に終わらせるのは難しいね。コメントまとめるのも1週間ではまとめるわけにはいかない。

(井川)何をどういう風にまとめるか、イメージがわからない。それより議論したことを経済学部としてどういう風に受け止めて、どういう風に生かそうとされるのかをまとめていただいた方がよい。出された案に付け加えたり直したりするのはよいが、たたき台そのものを作るのは難しい。議論しなかったことも書くわけですか。

(能見)それはしないでしょう。ただ今日おっしゃったことをコメントにまとめてもらうだけでいい。

(中村)それだと、事務局でまとめてもらった方が話は早い。

(橋本)今日の議論を12月16日のメモのような形にまとめていただいて、それに対してニュアンスが違うぞという点があれば、コメントを加えるという風に受け取ったが、違うのですか。

(福井)記録を加除修正するというより、報告書をどうまとめるかということです。記録をベースにコメントをまとめていただいて、それを報告書にのせる。その時にそのまま掲載するか、私どもでまとめる形にするか。いずれにしろ今日の議論については記録をお送りしていただき、その上でコメントをいただくことを想定しておりました。

さらに今の議論で三番目の方法として最初から私どもの方で報告書案を作成し、委員の方々に見ていただくというお話が出たかと思います。三番目の方法だと委員会の記録をベースにするということになり、質疑で止まっている部分もあるので、報告書の形にはならないと思ったのですが。

(能見)今日の議事録を整理した上で、各委員が自分の言ったことをまとめていただく。長くても短くてもよいが。完全に経済学部がまとめるとするとそれは外部評価ではないのではないか。

(福井)外部の先生方から意見をいただくという趣旨からすると、ご提案した方法がよいと思ったのですが。

(能見)議事録は細かく、正確なものを作っていた上で、それとは別に経済学部と

してどういう風に受け取ったかをまとめるという方法はあるかもしれない。

(井川)この後各委員からコメントを出すとする、新しいものがでてきたらどうするか。ここで議論した以上のことが報告書にのることになる。

(福井)私の個人的な感触としては、ここで出た意見に拘束されるわけではなく、後で考え直された意見があってもよいと考えておりました。

(井川)ここで議論していないことでも書いてよいというのはあまりにフリーハンドすぎると思う。ここでの議論を踏まえての報告書では。

(福井)そうだとすると、能見先生が三番目におっしゃったように、詳細な議事録を作成して、それとは別に経済学部としてどういう風に受け取ったかを添えて、それを報告書とするということでしょうか。

(井川)そうですね。それが橋本さんの意見にも近いのではないですか。

(橋本)賛成です。後から考えてこれもあるぞと言っても意味がない。この場で言ったことを経済学部として受け取ってまとめていただければよい。

(福井)わかりました。復唱すると、詳細な記録を作った上で、それを経済学部としてどういう風に受け取ったかまとめたものを付ける。それを委員の方々に確認していただいて、報告書とする。その過程で追記、修正がありましたら、言っていただく。ということですね。

(福井)ありがとうございました。二回にわたり、遠方から御足労頂き誠にありがとうございました。それでは、これで外部評価委員会を終わります。

以上